

2020. 3. 23

畑 啓之

人が非常識と言う「不可能を可能に」、今の時代こそこれが強く求められている

何が不可能？で、何が可能か？ そんなことはやってみなければわからない。皆で知恵を出し合いながら、うんうんと唸っているうちにそれを可能にするヒントが出てくるものである。仮に周りの人が皆「君は非常識だ。そんなことができるはずはない」と言った場合でも、その人々に対して自身の考えを言い続けていると、言い方を変えると、彼らを単なる鏡として利用したとしても、ある日突然に良いアイデアがひらめくものである。

このようにしてひらめいたアイデアには不思議な性質がある。それは「こうすればこうなるから、この問題は見事に解決する」と「不可能と唱えていた周りの人々」に理をもって説明しても、なかなか理解してもらえないことである。「不可能を可能に」において、難問を可能にするアイデアやその具体的方法というものは、思いついてしまえばどうということはないと思うのだが、それでもやはりいわゆる常識からはるかに外れたところにあるのか？あるいは、周りの人々の常識が「これはこうでなければならない」とあまりにも固まっていた、一歩もそこから歩み出ることができないものなのか？

現役時代（会社員時代）にはこの常識によく悩まされた。「こうすればできますよ」に行き着くまでには常にああでもない、こうでもないと考え続けるが、ある日パッとひらめく。その瞬間は本当に突然に訪れる。ひらめいてしまえば何のことはない。それは私の中では常識となる。そしてそれを上司に、そして周囲に提案する、あるいは実際に試してみてもうまく行くことを実際に確認する。それでも、その方法が市民権を得るまでには、生みの苦しみで費やした時間よりも長い時間が必要となる場合が多い（実際に多かった）。

今日の新聞記事は私の心に響くところが大きい。ものを生み出すこと、言い方を変えると工夫を加えること、さらには発明することは、その人が持つ「執念」の大きさに比例しているのかもしれない。永守重信氏はこれを「やる気」と表現しておられる。そして時代を江戸時代まで遡ると、すでに上杉鷹山が「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と看破している。

受験勉強を通して「執念」や「やる気」を得ることは可能だと考えるが、その時には知識の暗記ではなく、そこには理解し工夫する何かが必要なのではないか。安直な受験ノウハウの習得に頼ると、受験には成功するかもしれないが、人生にとって貴重な何かを失う可能性が大きい。永守重信氏はこのことを言っているのだと思う。

常識にとらわれない大学経営

日本電産会長・永守学園理事長
永守重信氏に聞く



一代で世界一の総合モーターメーカーを築いた永守重信・日本電産会長（永守学園理事長）が大学経営に乗り出した。偏差値とブランド信仰を支える受験教育を厳しく批判する永守氏に話を聞いた。

大学経営に乗り出した背景は？
創業は1973年。直後にオイルショックが起き他社が採用を手控えた。時代なので応募者には困らなかつたが、低偏差値大学の卒業生しか来なかつた。会社が発展すると、偏差値と入社後の仕事ぶりには何の関係もない。創業は1973年。直後にオイルショックが起き他社が採用を手控えた。時代なので応募者には困らなかつたが、低偏差値大学の卒業生しか来なかつた。会社が発展すると、偏差値と入社後の仕事ぶりには何の関係もない。創業は1973年。直後にオイルショックが起き他社が採用を手控えた。時代なので応募者には困らなかつたが、低偏差値大学の卒業生しか来なかつた。会社が発展すると、偏差値と入社後の仕事ぶりには何の関係もない。

日本の教育 風穴開ける

永守重信氏略歴

1944年8月	京都に生まれる
67年3月	職業訓練大学校電気科卒業
73年7月	28歳で日本電産設立(従業員3人)
2014年12月	公益財団法人・永守財団設立、理事長に就任
18年3月	京都先端科学大学を運営する永守学園(当時は京都学園)理事長就任

ら塾に通い、暗記とテクニックで入るから最上位層以外は普通の大学と変わらない。哀れなのは子どもたちだ。時代遅れのブランド信仰で遊びも忘れて勉強させられ、入学した途端、これで遊べると好き放題をやる。これではたくましいリーダーは育たないし、革新的な会社も生まれにくい。日本の閉塞感の原因だ。

偏差値と能力 無関係 ■ リーダー育たず

つたら残りの80年ずっとローカル線。こんな教育は間違っている。人間の評価にはIQとEQがある。IQは頭の良さだ。持って生まれたもので、努力で何とかなるものではない。一方のEQは感情指数だ。情熱や熱意、執念、最後までやり遂げる意欲など。要は「やる気」だ。EQは教育と経験でいくらでも伸ばすことができる。IQよりEQの高い人を探った方がよい。

余談になるが、数学と言う学問は素晴らしい。ヒラメキの学問である。受験数学では、大学の入試問題をいかに早く解くかということがポイントになる。入学試験に出る問題の特徴は、必ず答えがある、その解き方にも定型があり試験時間内で必ず解答が得られる、解法は高校での学習内容の範囲でありその枠を超えてはならない、などである。だが、数学というものは、答えがあるかどうか分からない問題を、ウンウン言いながら考えるものであると私は認識している。ウンウンと何日間も考え続けていると、突然に答えがひらめくことがある。数日かかってやっと解いた問題が、別の方法で瞬時に解かれることもある。答えに至る道は一つだけとは限らないということである。これは、発明に通じるところがある。

「不可能を可能に」を実現するためには、固定観念を捨てること。この問題はこういう解き方をするものだ、という常識を捨てることである。